

疾病教育における糖尿病キャンプの役割 小児糖尿病キャンプの理念と便益

(分担研究：小児期発症インスリン依存型糖尿病の生活管理に関する研究)

貴田嘉一¹⁾、伊藤卓夫¹⁾、戒能幸一¹⁾、後藤義則¹⁾、
中村慶子²⁾、一色保子³⁾

要約：糖尿病キャンプはインスリン依存型糖尿病（IDDM）患者の医学的、心理的、社会的問題を解決し、IDDM患者の quality of life を得るための効果的な患者教育の1つとして、各地で行われている。今回我々は、14歳から20歳のIDDM患者23名（男性9名、女性14名）の治療や日常生活などの問題点を調査し、糖尿病キャンプのニーズと今後キャンプをさらに効果的なものにするためにスタッフが果たすべき役割について検討した。

見出し語：インスリン依存型糖尿病（IDDM）、小児糖尿病キャンプ

【はじめに】インスリン依存型糖尿病（IDDM）患者は今なお多くの医学的、心理的、社会的問題を抱えている。糖尿病キャンプはこれらの問題を解決し、IDDM患者の quality of life をより良くするために効果的な患者教育の1つとして、全国各地で行われている。今回我々は、各地のキャンプに参加している14歳から20歳のIDDM患者23名（男性9名、女性14名）のインスリン治療や日常生活など問題点をアンケートにより調査し、糖尿病キャンプのニーズとキャンプをより効果的にするためにスタッフが果たすべき役割について検討した。

【対象および方法】対象は、全国16ヶ所のキャンプから推薦され、第3回国際小児糖尿病サマーキャンプに参加した14歳から20歳のIDDM患者23名（男性9名、女性14名）である。23名中14名が1日4回法での、9名が1日2回法でのインスリン自己注射を行っており、ヘモグロビンA1c値は $8.7 \pm 1.7\%$ （平均 \pm 標準偏差）であった（図1）。また今までの糖尿病サマーキャンプ参加回数は1～10回（ 4.8 ± 2.8 回）であった。これら対象に対し、治療状況、日常生活などに関するアンケートを行い、医師、看護婦、栄養士、心理士などのスタッフが糖尿病キャンプで果たすべき役割について検討した。

【結果】

1) インスリン治療および合併症について

現在のコントロール状況についての満足度は、約半数が満足と答えたものの、不満足と答えたものが約20%みられ（図2）、満足度はヘモグロビンA1c値とほぼ平行していた。現在受けているインスリン治療に対しては多くのものが満足しており、1日4回法と1日2回法を行っているもの間で差はみられなかった（図3）。また夜間睡眠時の低血糖の頻度はごくまれまたはみられないものが多かった（図4）。しかし将来の合併症に関しては多少の差はあるものの約80%のものが不安に思っていた（図5）。

2) 食事について

食事に関しては全員が1日の指示単位を知っており、御飯、食パンや牛乳などの簡単な食品の単位計算や食品交換は可能であった。しかし実際の料理の単位計算や食品交換に関しては約半数ができないと返答し（図6）、食事に対し制約されていると感じていた（図7）。また、約1/3のものが学友との夕食時に不便を感じていた（図8）。

3) 将来の就職、結婚について

将来の就職に関しては男女ともに約2/3が多少の差は

1)愛媛大学医学部小児科

2)愛媛大学医学部看護部

3)愛媛大学医学部栄養指導室

(Dept. of Pediatrics, Ehime Univ.) (Dept. of Nursing, Ehime Univ.) (Dept. of Nutrition, Ehime Univ.)

あるものの約80%のものが不安に思っていた(図9)。結婚に関して不安を持つものは約70%で男女差はみられなかった(図10)。出産に対して女性では不安感を持つものが多くみられた(図11)。

【考案】IDDMを有する小児は多くの問題を抱えており、これらの問題の解決を意図した糖尿病キャンプが必要である。今回の我々は、今までに平均約5回糖尿病サマーキャンプを経験した14~20歳のIDDM患者を対象にアンケート調査を行ったが、身体的(医学的)な問題点として、血糖コントロールが不良なキャンパーに対する指導があげられる。インスリン治療や食餌療法について、時間をかけて生活に即した指導を行うとともに、良い血糖コントロールが将来の合併症を防ぐということをカウンセリングし、血糖コントロール改善の動機づけを行うとともに将来の合併症に対する不安を軽減させる必要がある。次に、食事に関しては、簡単な食品の単位計算や食品交

換をマスターした後、色々な料理の単位数がおおよそ把握できるように指導することが必要であり、そうすることにより食事に対する制約感を除くことが可能であると考えられる。具体的には食事をビュッフェ形式にし、キャンパーが指示単位数分をとって食べさせるようにするとか、調理実習を行なうことなどが考えられる。将来の結婚や就職は非常に重要な問題であり、糖尿病キャンプの経験者で現在結婚や就職している人に依頼して、キャンパーにカウンセリングしてもらうことが必要である。さらに、キャンパーの自立性をうながすために、リーダーシップ研修を行ったり、キャンパー積極的に参加できる形のキャンプになるようにスタッフが努力することが必要である。また結婚や就職までIDDM患者が差別を受けないようにするために、社会に対し働きかけることも大切であり、キャンプが地域活動へ積極的に参加することが望まれる。

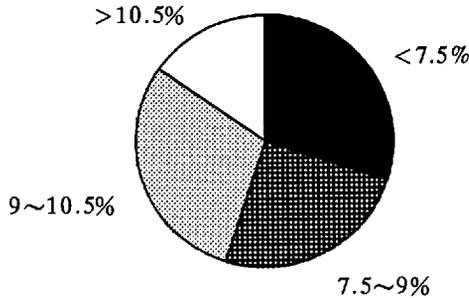


図1 調査時のHbA1C値

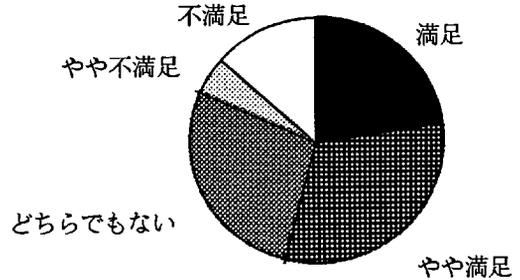


図2 現在のコントロール状況

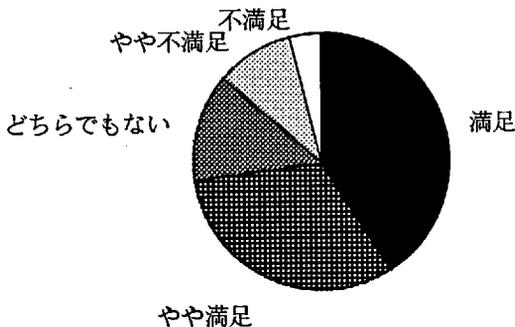


図3 現在のインスリン治療に対する満足度

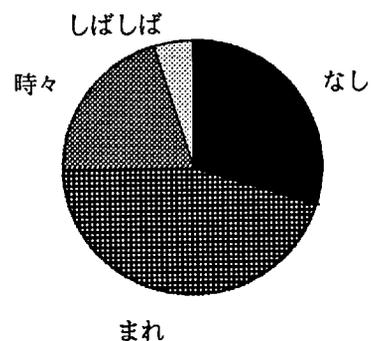


図4 夜間睡眠時の低血糖

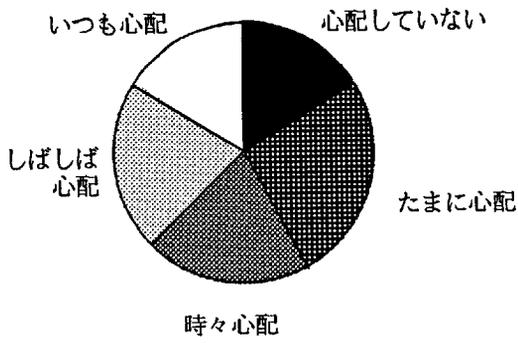


図5 将来の合併症に対する不安度

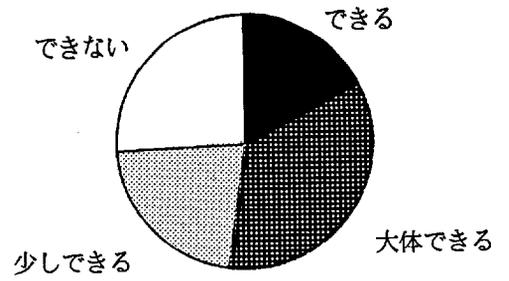


図6 実際に料理をみでの単位計算

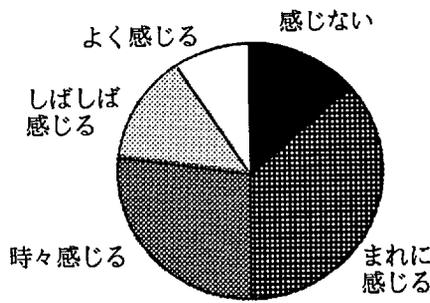


図7 食事に対する制約感

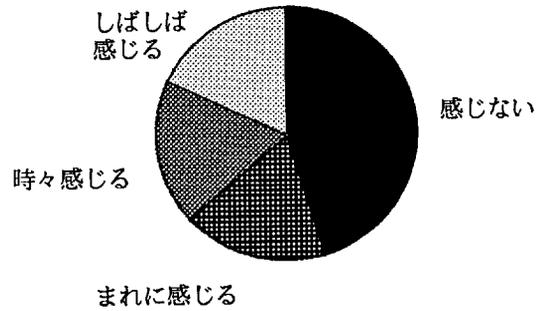


図8 学友との外食に対する制約感

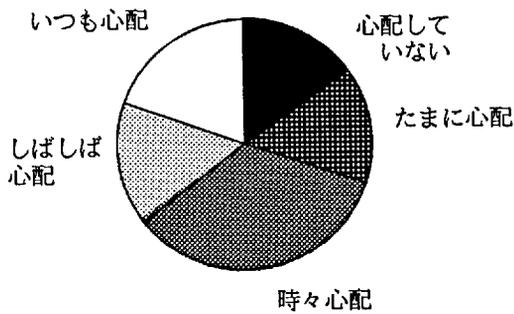


図9 将来の就職に対する不安度

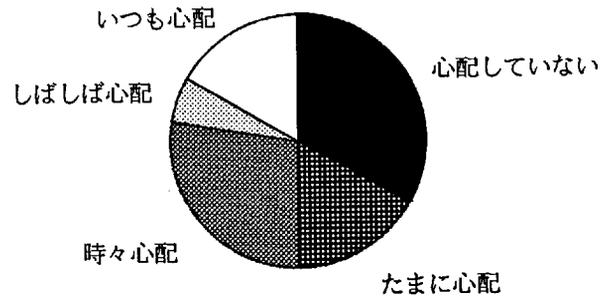


図10 将来の結婚に対する不安度

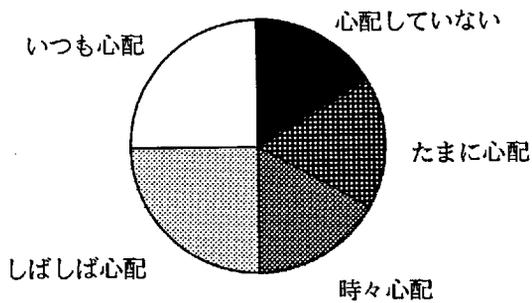


図11 将来の出産に対する不安度 (女性)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:糖尿病キャンプはインスリン依存型糖尿病(IDDM)患者の医学的、心理的、社会的問題を解決し、IDDM 患者の quality of life を得るための効果的な患者教育の1つとして、各地で行われている。今回我々は、14歳から20歳のIDDM患者23名(男性9名、女性14名)の治療や日常生活などの問題点を調査し、糖尿病キャンプのニーズと今後キャンプをさらに効果的なものにするためにスタッフが果たすべき役割について検討した。